

第四

得牛<sup>とんべう</sup>

力づくで牛をつかまえること。  
何とか悟りの端緒を得たものの、  
いまだ自分のものになっていない姿。

久しく郊外に隠れて見つからなかった牛に、ようやく今日、出逢った。  
しかし牛の境涯きょうがいがすばらしく、追いつけない。  
清らかな芳草だけを慕い、どんどん先へ進んでしまう。  
頑かたな心は勇み、いまだ野生かたそのものである。  
手なづけようと思うなら、鞭を加えるほかはない。

## 序



## 頌

大死一番、死にきる覚悟でかの牛を捕まえた。  
 しかし心身ともに頑強で、野生を取り去ることはできない。  
 時には澄んだ高原に上ってありありと姿を見せるのだが、  
 また、煙雲たちこめる深谷にもぐってしまふ。

## 鑑賞

ようやく牛を見つけ出し、我が手に捕らえることができました。

しかし牛（本来の真の自己）と自分（現在の自己）の隔たりは大きく、捕まえようとしても、牛は暴れ、逃げてしまいます。

ぴんと張り詰めた綱は、必死になって、力づくで真理を獲得しようとする人生最大の努力をあらわします。

真の自己が勝つのか、はたまた昔の自分へ、迷いの世界へと引き戻されてしまうのか。

第六

騎牛歸家

牛の背に乗り家へむかうこと。  
悟りがようやくやく得られて世間に戻る姿。

戦いは終わった。もはや牛を得ることも失うこともない。  
安心して樵せうの歌を歌い、笛でわらべ歌の節を吹く。  
牛の背に横たわり、広々とした空を見上げる。  
誰が呼ぼうとも振り返らず、引きとめようとも留まることはない。

## 序




 頌

牛に乗ってゆらりゆらりと家に帰ろうとする。

羌族きょうぞくの笛を吹くと、美しい夕焼け雲に響きわたる。

その一拍一音に、無窮の心が宿っているのだが、

真にわかりあった相手には、わざわざこの気持ちを告げることもあるまい。


 鑑賞

ついに牛と自分の完全な融合、一体化が達せられました。

もはやどこにも逃げることもない牛の背に乗り、ゆったりと家路をたどる主人公。真の悟りを得た状態を描き、この同一化は、自然や周囲との調和ももたらします。